
黒乃魔術師

てん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒乃魔術師

【Nコード】

N0435Y

【作者名】

てん

【あらすじ】

彼は異端だった。彼は特殊だった。彼は特別だった。それゆえに――。

これはもしも現代に魔術が存在していたらの仮想の世界のお話。そのとある学園に変わり物同好会所属の四人を軸に話を進めていきます。

はじまり

こつ、こつと暗がりの中に乾いた靴の音が響く。

冬の真夜中の学校の校舎、中年の警備員が一人、最終の見回りをしていた。手には懐中電灯、真夜中になると電気の供給を一切遮断してしまう学校の方針のせいで警備員一同はいつも億劫な思いをさせられていた。

「ふう、寒いなあ。」

誰かが放置して帰ってしまったようで、ちょうど最後の教室の窓が空いたままである。最近はずっと寒くなってきた。寒いので夏場と違って夜の見回りは気温の面でも辛い。学生たちに心の中で文句をいいつつも、彼はその窓を閉め、鍵を掛けた。

「ふう。」

——ようやく帰れる。

彼はその豊かなおなかを揺らし、一つのびをする。

どうにも最近動きずらくなってきたような気がする。この前の健康診断でも少し危ない数値だったし、やっぱり運動はするべきかな。

仕事終わりの余韻に浸り、そんなことをぼんやり考えながら窓の外のを眺めていると、不意に背後から何かの物音が聞こえた。

「ん？」

振り返る。

「んん？」

手に持った懐中電灯でそこらを照らしてみても、あるのは生徒たちの机と椅子、教壇のみ。いくら探してみても何かが落ちたような跡さえもなく。はて、と彼は首をかしげるも気のせいか、と思いなおし教室をでようと歩みを進めた。

——今日は奮発して、いいもん食って帰ろうかな。同僚を誘って飲みに行くのもいいかもしれない。

この後の自分へのご褒美に思いをはせながら教室の扉に手を掛けた時だった。

またもや背後で何かが落ちたような少し大きめの物音。彼は伸ばしかけた手をぴたりと止めて首だけで振り返る。

「？」

やはり何も見つからず。しかし一度ならず二度も物音を聞いてしまったのだ、気のせいで済ましては自分が雇われている意味がない。

少しだけ彼は不気味さを感じながらも体も振り返らせる。

「なんだってんだあ？」

しかし、とりたてて怪しい人物はなく。遮る物のないこの空間でそんなものがあつたら一発で発見できるのだが。

そして、さらに足元を中心に照らしながら教室を二三周してみるもののこれといって怪しいものはない。それどころか週末の今日はきちんと掃除がなされておりゴミの方が少ないくらいだった。

彼は次第にきつと空耳だったのだと、都合のいい方に考え始める。それは人間としては自然の思考回路、だんだん深くなってゆく不安の紛らわすためにも必要なことだった。

むろん、ごく普通に考えてみればこんなさびれた都心部はずれの公立学校、しかも真夜中の教室である、何が悲しく侵入なぞしなければならぬのか。どうかんがえても空耳の確率の方が高かったし、それで完結させてしまふべきだった。しかし――

――どうやら今日の彼は運が悪かったらしい。

「うおおおおお――！」

突然の振動。中々大きな規模であるらしいそれに彼は耐え切れず教壇に尻もちをついてしまう。

教卓の下に隠れようにも動けなくなるほどの揺れによって彼には耐えることしかできず、できたのは事態の急変についてこれていない脳みそがパニックから戻ってくるのを待っていることだけだった。

果たしてどれほどの時間だったのか、それが終わった頃には教室中の備品は散乱しつくし、彼はようやく自分は地震にあったのだろくと認識し始める。

「
おおお、すごかったあ。」

あまりの驚愕に思わず一人ごつ。そしてよつこらせ、と重い体を持ち上げたところでこの日最大の悲劇が彼を襲った。

「おお!？」

平衡感覚のない状態で無理に体を持ち上げたためにバランスを崩して彼は、黒板の方に倒れこんでいつてしまふ。とつさにぶつからないうちに手を突き出してちょうど黒板の表面と接した時、何故か、ぱりっという乾いた音とともに、いともたやすくそれをぶち破りその奥の空間へと彼は投げ出された。

「おおおおおおおおっおおっお!!」

彼の悲鳴が落下とともに聞こえなくなつてゆき、やがて夜の静寂へと戻つてゆく。残ったのは荒れ果てた教室と不自然に大きく穴のあった黒板、彼の所持していた懐中電灯が一つ、床に転がっていた。

はじまり（後書き）

なんともしまりのなく、わけのわからんプロローグですいません。

というかプロローグが完結してないですね。

本当はこの後も話を続けてかこうかと思ったのですが、とりあえず
ぼかして本編へと話を続けます。

のちのち本編とも接続してゆく予定ですので、とりあえず初心者だ
なあと鼻で笑って許してください。

？

とある学校の一室。

大きな音をたてて跳ねる机。自らの手を机に叩きつけ身を乗り出した格好になった少女は、その燃えるような赤い瞳で室内を見回した後、その凜と響く声を走らせた。

「注目！！」

同じ室内にいるその他の少年少女は3名、その内の2名が手を止めて顔を上げ、その少女へと視線を移す。困惑を顔に張り付けながらその中の一人、小柄で黒髪の少し気弱そうな少年が戸惑いがちに声をあげた。

「えと、どうしたの？」

その問いには答えずに、少し不機嫌そうに瞳と同じ色の鮮やかな長髪を一掻きしてから少女はおもむろに口を開いた。

「ねえ、教えてちょうだい白^{つくも}。此处は一体どつかしら？」

「え？え、えと 部室 かな？」

少年の返答に少女は、さらに少しだけ顔を不機嫌そうなものへと変える。そして言葉にわずかのいらつきをのせて再度、今度はその隣の桃色の髪を持つ、おっとりとした雰囲気少女に問いかける。

「晴美、ここの部活名を言ってごらんなさい。」

「ええつと 『秋奈探偵事務所同好会』 ですよね。」

腕を組み大袈裟に頷くしぐさをした少女は最後に、その正面に座り我関せずと温かい湯気の立つた煎茶をすすっている人物へと目を移した。そして、そのきれいな群青色の髪を縛り上げポニーテールにしている整った顔立ちの少女、に見える男子制服に身を包んでいる少年へと問う。

「で その栄えある探偵事務所所属職員の諸君は一体何をしているのかしら、凜？」

その少年はゆっくりと机へと湯のみを置き、目をつぶりながら煎茶の余韻をしばし楽しんだ後、これまたゆっくりと顔を向け億劫そうに、しかしきれいな高い声で不釣り合いに口を開いた。

「休憩時間やないんですか？」

「——ちつがあああああうー！」

そのお気に召さない、しかし半ば予想通りの返答に少女が吠える。

「あんたたち！此処がどこかわかってんでしょ！？探偵事務所よ探偵事務所！！それを毎日部室にきてはぺちやくちやくちやくちやくちと晴美はいちやいちゃしてるし、凜なんて茶あしばいてるだけじゃないのー！！」

己の激情に任せ一気に、周りの迷惑を考えてそれなりの声音で少女はまくしたてた。その長すぎるセリフに少し赤い顔で息を切らしている。

「でも 如月さん。そんなこと言っても何をすればいいのですか？」

「そうだよ 探偵事務所について、誰からも依頼なんか来ないし、することないと思うんだけど。」

困ったようにほんわかとした笑みを浮かべる少女と、苦笑いをする少年の抗議にその少女は高らかに宣言する。椅子に片足を乗せ、胸を張って微笑を浮かべながらあたかも自分が正しいかのように。

「事件がないなら、事件を探せばいいじゃないの！！」

言っていることはわりかし暴論ではあったのだが。

「さすがに無茶あるで。そんなぼんぼん事件起こったらまらんやろ。だいいち探偵事務所いうても同好会やし実質便利屋さんみたいなもんやないですか。」

「うーん、まあそうね。まだ開いてから1カ月あまり。未だ新人のあなたたちにはそこまで求めるのも酷かもしれないわね。」

「なら どうするの？」

その問いかけに待ってましたと言わんばかりに不敵な笑みを浮かべる少女。

「だから言っただじゃないの、聞きなさい。あんたたちがぼわぼわしているあいだに所長たる私が面白そうなネタを見つけてきてやったわよ。」

「あらすごい、この同好会を開いてから初めての事件ですね。」

「そうだね。思えば僕たちこの同好会に入ってから一カ月、ずーっと放課後にこの部室にやってきて時間をつぶしてきたんだ。すごいや。」

あはは、とのんきに笑う少年に再び青筋が浮かびそうになるも、少女はぐっとこらえ口を開く。

「それで、そのネタの方なんだけれど。あなたたち、最近噂になつてゐる話題知つてゐるかしら？」

その問いかけにそれぞれ頭をひねるもどうやら該当する事柄はないようで、再びお茶をすすったり、困つたように笑つたり、素直に頭を横にふるなど各々否定の意を見せる。

「そう。あたしも最近聞くようになったんだけど、変なうわさが二つあつて。確か。ああ、そうそう。夜中になるとええと。なんか変なうめき声みたいなのが聞こえるって話なのよね、少し眉つばっばいけど。」

「いやいや、なんやその昔ながらの学校七不思議みたいなんわ。さすがに嘘やろ。ってかいったい誰が夜中の学校のうめき声を聞くんや。」

「あはは。まあ確かに少しうそくさいかな。」

「ですねえ。。」

なんだかんだで期待していたのか、少し興味がそがれたように言う自らの部下たち。なんだかなあ、と心の中で愚痴りながらも少女は話を進めた。

「文句言つたらネタもつてきなさいよネタ。まったく。まあ、いいわ、もう一つのほうは現実的だし、わりかし面白そうよ。」

「へえ　どないなん？」

「最近学校のいたところで発見された妙な魔力残留のことよ。」

「魔力残留？生徒のいたずらではないのですか？」

「ええ、最初は先生たちもそう思ってたらしいわ。軽いいたずらで生徒が魔法使つてそれがのこるってことわりとあるらしいし。今回もそれで魔法を使つてその残りかすが漂つてるだけなんじゃないか、って。でもわりと頻繁に痕跡が見つかったらしくて、最近ちよつと本格的に調べようかって話が出てるらしいの。」

「へえ、なんか面白そうだね、ちよつと不気味だけど。でもそんな話どつから仕入れてきたの？噂って言つてたけど僕は聞いたことないな。」

「まあ、確かにあたしも知らなかったからね。ぶっちゃけ二つ目とかは先生の間の噂なのよ。」

「ああ　内海^{うちみ}さんか。」

「　誰や？」

「兄貴よ、ここの教師やってるの。」

「まあ、お兄様が？若いのでしょうか？優秀なんですねぇ。」

「まあ、優秀っちゃ優秀なんだけどねぇ。」

その言葉に、思わず目の前の少女の筋肉質の兄を思い出す黒髪の少年。幼少からの付き合いよりお互い知らないところの少ない間柄であるだけに、その優秀という言葉には苦い顔と乾いた笑いを禁じ得なかった。

「おお、せや。黒乃と如月はんは幼馴染やったな、そのお兄さんのこと知つとるんやろ？」

「うん　まあ　あはは。」

「？」

しかし事情を知らない他の二名は、その要領を得ない回答に首をひねる。

「とってもいいひとだよ　うん、とっても。」

とりあえず当たり障りのないように言葉を濁して伝える。別に嘘をいっているつもりはない、むしろ本心ではある。

己の身内の恥が露見する前にと、少女は咳払いを一つして話をもとにもどす。

「まあ、兄貴のことは今はいいわ。で、どう？なかなかだと思わ

ない？」

「そうですね。暇つぶしにはちょうどいいんじゃないでしょうか。」

「せやね、そろそろここで腐つとるのも飽きてきたころやし、ええんやないの。」

「うん。」

そして、部員たちのわりかし肯定的な返事をつけた少女は満足そうに笑みを浮かべ、握りこぶしを作った片腕を振り上げて言い放った。

「あんたたち！！秋奈探偵事務所の初事件、気合い入れていくわよおお！！」

「ぐぬぬぬ、あんちくしょおお。」

その少女、如月 秋奈はいらだっていた。

自分の所属する同好会が創立以来一カ月、初めての活動らしい活動を始めたのが昨日。その日は課題を決めたところで下校時間が来て

しまい残念ながら解散。翌日から詳しい活動内容を決めようということになってその日は部員たちと別れて帰宅をした。

そして翌日。ようやく自分のやりたいことがやれそうだと――1カ月のあいだの、親睦を深めるという名目の放課後のだらだらとした時間も嫌いではなかったのだが――気分をよく登校をして、一日中放課後を待ちながらそわそわと過ごした。

そして待ちに待った授業終了のチャイムを聞くや否や、その日の授業のことなど欠片ほども頭の中に入らないまでに部活のことばかり考えていた秋奈は即効で部室へダッシュ。

彼女に遅れてやってきた組の違う部員達を急かしながらも、とりあえず方針として、聞き込みや校内を回って情報を集めようということまでまとまったのは良かった。

そして、細長く東西に延びる形の校舎を2分して、2人1組でまわり校内を回ろうということになったので、彼女とペアとして組まれたのがカトリヌ・晴美。

なんでも異国からの留学生で、酔狂なこと、にわざわざこんな田舎の学校が目当てで留学をしに来た、ということとを本人から聞いたことがあった。

そして晴美と担当となった西側の校内をまわること1時間。先生へと聞き込み、生徒へと聞き込み、校内のいたるところをまわり、結局何も分らず惨敗して帰ってきた秋奈は、ものの見事に不機嫌となっていた。

さすがに彼女も初日からうまく情報が集まると思っていたわけではないが、しかし分っているのと納得するのは別物で。楽しみにしていた活動に期待を寄せていただけ、初めての部活にして何も分からなかったという結果はすこしばかりやりきれない思いがあった。

結局、部室の備品である長机に額を押しつけながら小刻みに頭を揺らし、低い呻き声をあげる少女に、柔らかい笑みを浮かべお茶とお菓子でそれをなだめる女生徒という奇妙な構図が続くこと数分、この部屋唯一の扉が開き、東まわりの二人が幾分か疲れた表情で帰ってきた。

「ただいまー——って何してんの秋奈ちゃん。」

「あー、しんど。」

入ってくるや、ひとりはその幼馴染の奇行にきつちりと反応をし、もう一人は我関せずとばかりにふわりと長机の椅子の内の一つへと座る。

「はあ。わるいんやけど、お茶いれえてもらえまへんか？
晴美はん。」

「はいはい。」

どこから取り出したのか、きつちりと自らのデフォルト装備である名前入りの湯のみを晴美へと渡す凜。そして、やや古めの椅子の背もたれを少しばかりきしませながら、疲労からか大きなため息を一つ吐いた。

白も若干の混沌とした空気にいつもの苦笑いを浮かべながら席に着

く。

2人の帰還を認めた秋奈も、額に少しばかり赤い跡を残しながらもその顔をのそりとあげる。その顔は未だやや不機嫌そうではあるが。

その後、淹れたての煎茶を注いで帰ってきた晴美が、凜へとその湯のみを渡して席に着くのを待ってから、秋奈は口を開いた。

「で？なんかわかったの？」

そのややぞんざいな聞き方に、しかし慣れているのか白は気にした様子もなく、お茶をすする凜に代わり答えた。

「えっと　まあ、手掛かりらしきものがあつたといえばあつたような。」

「ほんとう!!」

態度一変、先ほどの不満顔はどこへやら吹き飛ばし嬉しそうな表情を浮かべる秋奈の分りやすさに、凜までもが少しばかり笑みを漏らす。

「それで、何がわかったのよ!!」

「ん　えっと、凜君とまわってた時のことなんだけど――」

？（後書き）

すみません

切り方しまらないっすね

私、関西弁わからないので自分の創作関西弁になっちゃおうと思います。誰か「関西弁こんなじゃねえ」と憤慨してくれる方がいたらアドバイスしてくれるとありがたいです

あと、部屋の想像つかない人いるでしょうか？あんまこだわりないんで、とりあえず少しせまめの文芸部？みたいな感じだと思います。なんか秋奈ちゃんがふてくされてるけん。ちょっと不自然かなと思っただのですが、一時間も学校歩きまわって疲れて、思ったより部活楽しくなくて、ダレた。

そういうことにしておいてください。うちの姫は我がままなんです。

？

「たのもう！！」

薄暗い部屋の中に場違いな明るい声。突然開け放たれた唯一の出入り口から、薄明りとともに入り込んでくる。予期せぬ訪問者にその部屋へと閉じこもっていた生徒達は、逆光で浮かび上がっているシルエットへと注目を向けた。

そんな注目などお構いなしその薄暗闇の中へと入り込み、少しばかり足元に気をつけながら、一番奥の大きな机に座っているこの部屋の主のもとへと足を進める四つの人影。

「なあーんかじめつとしてるわねえ。」

「まあまあ、なにか不思議な感じがしていいじゃないですか。」

「。。」

「うちはこんな結構好きやで。」

そして若干一名は、仲間たちのマイペースぶりに申し訳なさそうな顔をし閉口しながらも、思い思いに軽口を叩きつつその机へとたどり着き、その代表格たる少女が目の前で呆然としている人物へと用件を告げた。

「オカルト部部长、灰汁見^{あくみ} 不軌荏^{ふきえ}さん。話を聞きに来たわ――

――

「——ははあ、なるほどね。そのことを聞きに来たわけか。」

その少女、灰汁見 不軌荏はようやく合点がいったとばかりに大きく頷く。目の前にさしだされた粗茶の湯気の奥で、苦笑いを漏らしている少年をジト目で少しばかりひと睨みした後小さくため息をついた。

自慢の長い黒髪を梳いて撫でるようにしながらも、少しばかり困ったように頭をかく。

「まったく、そうならそうと言ってほしかったな。何かと思ったじゃないか。」

「あはは、すみません。うちの人達が。」

あの後、あれよあれよという間に白達の部室へ連行されてしまった彼女。事態の把握もできぬまま自分の状況の変化に対応できず、矢継ぎ早に己に掛けられる意味不明な質問。戸惑う彼女に気付いた最も常識人である白が、逸る秋奈達をとどめさせ、いままで説明をしていたのだった。

「まあ、幸い今日は大した活動もしていなかったし、部員達

には勝手に解散するようにも言っておいたから大丈夫といえは大丈夫なのだけど。」

「ほんと　すみません　。」

目の前のしょぼくれた様子の少年、隣にいるその仲間たちをみて彼女はまず、腹を立てるよりも苦笑いを漏らした。苦労していそうだと。

特にあの眼を輝かせて、いや、ぎらぎらとさせながらこちらを見ている少女は、上級生たる自分を此処まで引っ張ってきても悪びれもしないのだろうな、と。

しかし、此処でぐだぐだとしていてもどうしようもない。早く用件を済ませてしまおうと考えた彼女はいすまいを直して口を開いた。

「それで、何が聞きたいんだい？」

その言葉に身を投げ出さんばかりの勢いで、この部屋の主、如月秋奈が食いついた。

「今噂の妙な魔力残留についてよ。何か知っているのでしょうか？」

「　　ああ　　んー、知っている、といえば知っている　　のか　　な？」

しかし、その自信のなさそうな返答に秋奈は眉をしかめる。

「何　　どういことなの？」

「いやあ。知っている、というよりは独自の調査の検討結果だからそんなにあてにならないことが多いと思うよ？」

「まあ、なんでもええからとりあえず教えてくださいや。」

「そうですね、聞いてみないと始まりませんし。」

「まあいいか、笑わないでくれよ？」

そして彼女はひとつ咳払いをし、おもむろに口を開いた。

「ええと、私がこの噂について大まかに知っていることは2つ。まず一つ目、発見された魔力残留がある程度の規則性を持っているということ——」

「おろ？なんや意外とそれ臭いやん。」

「いいじゃない！いいじゃない！事件っぱいわよ！！」

「——その特徴とは、女子の頻繁に出入りする場所の割合が高いというものだ。たとえば、女子トイレであったり、更衣室であったりだね。」

『。』

出だしからのあまりの情報に、めいめい口を開け信じられないというような顔をする。その反応が予想通りなのか不軌荏は苦笑いを漏らした。

「なんだかそれを聞くと、はっちゃけた男子高校生のいたず

らに思えてきたよ。」

「ですねえ。」

「。」

しかし、ここで秋奈は怪しげな表情で眉を動かす。

「ねえ、でもおかしくない？なんであなたが魔力残留の発生現場なんかを知っているのかしら？」

「うーん あんまり理由は言いたくないんだけど、そういうわけにもいかないだろうね。黙っていてくれるかい？」

「内容によるわね。」

「まあ、別に変な理由じゃないさ。ええと、如月さん？」

「何かしら。」

不思議そうな顔をする秋奈にいたずらっぽい笑顔を浮かべ、不軌荏は不意打ちを喰らわせた。

「今日のパンツ、なかなか大人っぽいものを履いているんだね。」

「は？——っ！！」

突然の告白に呆けた顔をするも、その内容を理解すると同時に顔を真っ赤にさせ、スカートをおさえながら飛退くように椅子から立ち上がる。恨めしそうな目で目の前の少女を睨むも、不敵な笑みを返

されるだけだった。

「ふふ、いじわるがすぎたかな？つまりはこういうことさ。」

不軌荏は楽しそうに笑いながら己の手を地面と水平に持ち上げ、脳みそで組み上げたプロセスをもってその神秘を発動させる。

少しばかりの発光とともに手の少しばかり上空に出現したのは、眼球を模した魔力の塊だった。

「空気中の魔力を操ることによって、魔力に視覚的情報を伝達する性質を持たせる魔法だよ。監視用などでよくつかわれる魔法だね。これで職員室の情報をちよちよいと見せてもらったわけさ。ちなみに、分り易くするために眼を出現させたけど、実際に使うときは何もあらわれないからね。」

「でも それってすごい魔術ではないのですか？まさか身の回りにそこまで本格的に魔術を使える人がいるなんて。」

事実晴美の言うとおりだった。ここは公立の一般高校。せいぜい生徒が使える魔術といったら、周りの温度の上下変換や、水素原子を集めて水を発生させるくらいの生活密着型の魔術が主であった。しかもその規模も小さいものに限り、だ。

そもそも魔術専門学校でない限り教科単位として教えられる魔術は基本的にその理論が主であり、ある程度の実践なら家庭内で軽く教えられるものも多いだろうが、そこから殺傷能力がつくまでに発展させようという人間も極少数であるのが現実。

世に一般的に知られている対人型の魔術と定義づけられているもの

はこの国において、危険なものであり気軽に扱うものではないという観点から政府公認の学校以外では生徒に対するその伝達を禁止されているし、基本的に人々も一部例外を除き、このご時世にそんなものに目を向けようとは思わない。

例外的なものでいっただら魔術犯罪者用の、各地域ごとの治安を取り締まるために設置されているASアンチスキルによる魔術行使。裏事情に精通している人たちによる違法な魔術継承。ごく一部の家系における、昔ながらの秘術というものが存在しているとまことしやかにさやかれることもあるようだが、大多数の人間からしてみたら一生触れることのないであろう分野の話である。

ましてや監視用の魔術といったら知っている人事態稀であり、プライバシーの侵害の可能性もあることもある。さらにASの中でも主に、あまりいい噂のない部署によって使役されているという事情も加わり、知られている限り基本的にはいい目で見られない類の魔術でもあった。

そのことを分っている不軌徒も少しはつが悪そうに首をすくめる。

「この魔術のことについてはあまり言及してもらわないと助かるかな。家庭の事情云々がかかわってくる話なんだ。」

「まあいいわ。それもあるけど、どうしてそんなこと知ろうと思ったのかもきになるわね。」

「ああ、いや それはまあ。」

「どうなされたんですか？」

少しばかり目を泳がせた不軌荏だが、顔を薄く朱や青に染めながらもためらいがちにその口を開いては閉じて開いては閉じてを繰り返す。

「い、いや　大したことではないんだ、本当に。あ、あまり気にしないでくれ。うん。」

そのあからさまな反応に不信感を抱かないことはなかった四人だったが、しかし。憚られる気持ちの方が強かったようで、深くは追求せずに次を促すことと決める。

「まあ　それはいいわ。2つめ、教えてもらえますかしら？」

「ああ　うむ、そうだな、2つ目だ。これはわりと目撃情報も寄せられている話でね。なかなか興味深い。」

「へえ、なんなんですか？」

「うん。人がね　消えるらしいんだ？」

「　　どういふことなんでしょうか？」

「いや、なんでも校舎の壁へと溶けるように消えて行ってしまう人型を見た、という話なんだ。」

「きたわああ、なんや一番眉つばくさいやないですか。」

「いやいや、中々興味深いだろう？一昔に信じられていた幽霊のようではないか。なんでも夕暮れ時になるとあらわれるらしいよ。それを見たという人の話を聞くとだいたい帰宅直前とか、そういう

人たちがばっかだったからね。」

「いや、そもそも事件とあんまり関連なさそうよね、これ。」

「むう、確かにそれを言われると弱い気もするんだけどね、だいたい耳にし始めた時期が同じくらいだったから一応気にとめていたんだよ。それにこれでもオカルト部部长だし、そういう話には弱いんだ。気になってしまつて。」

そこまで言い切つて不軌荏は、目の前のお茶へと手を伸ばしそれをする。力を抜くように息をひとつついてから少しばかり観察するような目で問いかけた。

「まあ、心もとないものだけど私からはこんなものだね。役に立ててなかったら申し訳ない。さて、今度は逆に聞きたいのだけどいいかい？」

「なにかしら？」

「なぜ、私のところに来たのかということなのだけれど。不思議でしょうがなかったんだ、私は誰にもこのことを言つてないはずだからね。」

「え　えと、なんでかしら？　白、なんでよ。」

「ああ、そういえば言つてなかったかな。えー、　凜君、あれだよ、あの人。なんていうんだつたっけ？」

「んー、あの太ったおっちゃんやろ。確かあ　あー、覚えとらん。」

「誰なんですかそれは？」

「あれあれ、警備員の優しそうなおじさんだよ。」

「——ああ、山下さんか。」

「あれ？知り合いなんですか、先輩？」

「ああ、ちょっとした、ね。わりと仲はいいんだ。それで、彼がどうしたんだい？」

「あ、えっと。色々聞き込みとかしているときにその人の所に行つたんですけど、先輩なら何か知っているだろう、って。本人は先輩から聞いたみたいなのを言つてましたけど。」

「へえ、見たことないわね。」

「まあ、警備員なんて普段は会うこともないからそんなもんやろ。入学したてやし。」

「——っあー、なんだかそんなこと話したような、話してないような。あ、あはは　　なんだかごめんね、疑うようなことを言っちゃって。」

「いえ。」

「それじゃあ、私はそろそろお暇しようかな。んー、少し疲れた——おっと。」

そう言つて不軌絵は立ち上がり、固まつた体をほぐすように背を伸ばす。ちょうどそのころ、奇しくもタイミング良く帰宅を告げるチャイムが鳴り始めるのだった。

夕刻から深黒の闇夜へと移り変わりゆく節目、肌寒い風を身に浴びながら同じ様相の学生服をまとつた一組の人影が肩を並べて歩いている。しばらく歩いたのちに同じ家の前でその足を同時にとめた。

その家の表札の名前は――『如月』

このあたりの住宅地における平均的収入から見ると、随分とおおきく作られた和式の屋敷であつた。立派に供えられた家壁、その内側に規則正しく植えてある松の木々、塀外からはうかがい知れないものだが自前の池までついて古い貴族の屋敷の再現のようでもあつた。遠目から見たときでも感じてしまうような存在感、しかしそんなものの歯牙にもかけないようにその二つの人影は家門をくぐりぬけ、屋敷内へと続く扉へと手を掛ける。

「ただいまあゝ。」

一人目の声は少女。普段ならば鈴の鳴るように良く通る声は今気だるげな調子で窄められている。その紅く燃えるような長髪と同色

の瞳、スタイル・顔立ちもよく、ある種のカリスマ性——良く言えば所謂姉御肌で僅か高校入学一週間足らずにおいてクラスの中心となっている人物であった。とある公立高校のサークル部長を務めている。

「ただいま。」

二人目の声は少年。一人目の少女との関係性を端的にあらわすのならば幼馴染兼パシリ。少し長めの黒髪を、顔を少しばかり覆ってしまつて目元ほどまで伸ばし、髪の間から垣間見える漆黒の瞳の色も加わって見ようによっては人に暗いイメージを与えるような容姿をしていた。とある公立高校のサークル部員となっている。そこに通う生徒からみた彼の印象は、一般高校生、特筆してひねりだそうとしても、一般高校生、の少年であった。

少女はけり飛ばすように靴を脱ぎ散らかし、後から靴をきちんとぬいだ少年が諫めながらもその少女の靴と共に玄関を整える。六年前から続いているいつも通りの光景。

少年黒乃 白は、少女如月 秋奈およびその家族の自宅で居候となっていた。

「つぶつはあゝ。いやあ、やっぱ白のご飯はおいしいわね。」

満面の笑みで秋奈は目の前で皿に盛りつけられた料理をつつく白に告げる。

二人が帰宅してから既に数時間、日は落ち切り少し前までは僅かな人通りのあったあたりも静まり返っていた。

そんな中、庭に面した縁側つきの小さな一室で二人は少し遅めの晚餐をとっている。

とても大きな屋敷の小さな一室で二人きりの晩御飯。はたから見たら奇妙な光景だが、最近の如月家ではこれが常となりつつあった。

少し前まではここに秋奈の兄、如月 内海も加わり三人で、ということが多かったのだが、どうやら最近は教師の仕事が忙しいらしい。夜も遅くなる頻度も上がってきて、なかなかうまくいかないものであった。

しかし、そもそも彼女の両親は秋奈が幼少のころより多忙で、今にいたるまで家に帰ることがあまり多くはなかった。そのため彼女が小学校の三年生まで兄と二人きり、下手をすれば一人で過ごすことも少ないわけではなく、白がこの家へ引き取られてきたときは大層喜んだ。だから白と二人きりに文句があるわけではない、むしろこれが彼女の普通となっている。

そして彼女は両親の仕事は知らなかった。魔術にかかわるものだということは聞かされたことがあったが、それ以上のことはおしえてくれなかったし、子供心ながら両親が自分にそれを知られるのを嫌っているのをぼんやりとわかっていたために聞いたこともないから。

湯気をもくもくと立てながら、自分の味覚を喜ばせてくれる料理、それを作った白に心の中でそこはかとなく感謝をする。

これが三年前まではひどいものだった。当時小学六年生の二人はもちろんがさつな兄に料理などできるはずもなく、食べるものはインスタントか運が良ければ冷めたご飯を温めたもの。さすがにまずいと思ったのか白が料理をしようと言いだしたのが三年前、ちょうど中学へ上がる時期だった。

その頃は秋奈もやる気をだして料理と一緒に勉強し始めたのだが、白がもともとそっち方面の才能があったのだらう。料理本や知り合いから習ってきたなどと言いだんどん腕をあげていった白を見て、女のプライドやら何やらを砕かれた秋奈はすべてを白に丸投げすることに決めた。

おかげで時に比例して白の料理の腕は上昇、それまで割とないがしるにしてきた家事の方にも手をつけるようになり、それに反比例して秋奈やその兄の、白に対する家事の依存が急増していった。

白は今では如月家専用の専業主夫状態となっている。彼がいなかったら三日とたたないうちに如月家の秩序は崩壊するだらう、家政婦でも雇わない限り。

温かいご飯が食べられるということに改めてしみじみと思いながら、頭の中で昔を懐かしむように振り返っていた秋奈の意識を現実へと引き戻したのは小さなバイブル音だった。

目を向けるようやらそれは白のポケットから聞こえてくるようで、本人は気付いていないのか晩飯をばくついている。

「白、携帯、鳴ってるわよ。」

「——ん？あ、ああ、ありがとう。」

食器を置きながらとりだした携帯を開き、それを操作しながらにやら画面とにらめっこをする白。

「なによ、また秘密のバイトってやつ？」

「うーん、多分そうみたい。ごめんね、秋奈ちゃん。」

「まったく、毎度毎度こんな夜中にどこで働いてるってわけ？しかも非常勤よね。」

白はその質問に軽く頭をかく。そして困ったような笑みを浮かべながら答えた。

「ごめんね、秘密。」

なんども繰り返されたこのやり取りに、いつものように秋奈もため息を吐く。

「まあ、いいわ。とつとってらっしゃい。」

その投げやりな態度に何かを感じ取ったのか、少しばかり悩むようすを見せたあと、白は立ち上がり対面に座りこんでいる秋奈の背後へと回る。その動作に秋奈は首をかしげた。

「ん？」

そして膝立ちとなり、目の前の秋奈の首回りに後ろから腕をまわし、軽く抱きつくような体勢となった。

「ごめんね　　いつてきます。」

「――ん。」

ゆっくりと立ち上がり、部屋を出て行くこととする白。去り際にとこびらきの扉の縁から顔をだした。

「多分遅くなると思っから、先に電気消して寝ておいてね。おやすみ、秋奈ちゃん。」

「おやすみ、白。」

お互いにほんのりと紅くなった頬を見られないように顔を少し背けながらの会話。今度こそ本当に白が出て行ったのを確認してから秋奈は食事を再開する。

「ふん。」

寂しさ故か、羞恥故か、ご飯をかきこむ秋奈は決めたのだった。兄貴の晩飯は残すまい、と。

？（後書き）

すみません、半分寝ながらかいてるのでめちゃくちゃかもしれない。

批判受け付けてるのでかきこんでください。

どんなつまらないことでもいいので待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0435y/>

黒乃魔術師

2012年1月10日03時46分発行